

Modus MDM 紹介セミナー

MDM導入のための実践的な勘所がわかる！



8個目の方法論「Modus MDM」のリリースに伴い、2016年1月28日（木）に、東京品川の「フラクシア品川クリスタルスクエア」にて、「Modus MDM紹介セミナー」を開催いたしました。

当日は、お陰様で100名弱の方にご参加いただき、皆さまの注目の高さがお伺えました。本紙にて、ダイジェスト版をお届けいたします。

商品紹介：方法論「Modus MDM」

MDM (Master Data Management) 構築におけるマスターデータ管理の基本概念、設計構築のシナリオ、基本設計・詳細設計・構築・移行の考え方やプロセスを体系的にまとめた方法論。



Modus MDM誕生の背景

最初に、「今から10年先のエンタープライズシステムは、どのように変わるのか？」を考えてみました。それは、企業システムとビジネスモデルは表裏一体であるからです。

まず、ビジネスはどのように変わるのか推測しました。商取引は益々グローバル化が進むこと、M & Aにより企業を超えたデータ管理が必要になることなどが考えられます。

よって、企業情報システムは、経営や業務ニーズに迅速に応えられる柔軟なシステムが求められます。そのため、求められるアプリケーション・アーキテクチャは、ビジネススコープ拡大に伴い、一企業の壁を越えたものが必要であり、クラウド化の進展により、疎結合アーキテクチャが必然のものとなります。また、ビックバンのリスク回避のため、都市計画型に順次に再構築していくことが大切です。都市計画型順次再構築というのは、例えを使って分かりやすく言うと、渋谷の駅の周りの再構築がそれにあたります。✕



ビジネステクノロジー戦略部 部長 中山 嘉之

元ユーザー企業の情報システム部で、30年間社内システムの構築に携わる。部門長兼ITアーキテクトとして活動実績あり。

ブログ：現場を極めたITアーキテクトが語る！「成功へ導く極意」

次に、「今のシステムの状態は？」というと、ERP、パッケージ、手組みの乱立によりサイロ化や癒着状態です。また、相次ぐ手組みシステムの増改築で、スパゲッティ化や無政府状態となっております。その結果、ビジネスのスピードについていけないことが深刻な問題となっております。

それではどうするかというと、段階を踏んだモダナイゼーションのシナリオ作りをします。先程お話しした都市計画型順次再構築のように、データHUBを起点に、あたかも都市計画の如く、緩やかに移行していくことが重要です。共通データを中心としたアーキテクチャを考え、最終的には、マスターデータやトランザクションデータを共通データとし、其々のアプリケーションに配信される仕組みです。

MDMで優先されるコンセプト

MDM構築の勘所をお伝える前に、MDM構築は単なるハウツーではなく、コンセプトを持つことが大事なので、コンセプトについてお話しします。コンセプトを持った上で、方法論を導入しないと、導入の過程で予期せぬ事態が起こった時、最初の目的から外れ、思わぬ方向に行きます。

まず、一つ目のコンセプト「優先されるアーキテクチャ」は、プロセス中心より、データ中心であることです。MDMは、自社のデータモデルを中核に適材適所なアプリケーションを疎結合します。

二つ目のコンセプト「多様性への対応」については、統一するより、相互接続性を優先します。再構築は一気にできませんので、統一するというエネルギーよりも、まずはお互いに会話できるようにします。それは、企業システムはROI優先という考え方からで、ビジネス側のベネフィットを考えます。

(裏面につづく)

MDMで優先されるコンセプト

三つ目のコンセプト「移行方式」は、ビックバンより、順次（ステップBYステップ）です。MDM構築時にマスターモデルを新たなものにするのは、事実上不可能なので、どうするかというゴールデンレコード（企業独自のデータモデルでデータHUB上の正本マスタとなるもの）にも世代をもつということです。これは、大きなシステムになればなるほど必要になります。

この三つのコンセプトを元に、MDMを実際に導入していくことが大切です。

ポイント

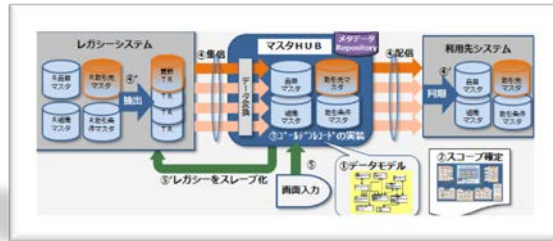
1. データ中心>プロセス中心（アーキテクチャ優先順）
2. 相互接続性>統一（多様性への対応）
3. 順次（ステップBYステップ>ビックバン（移行方式）

MDM構築の勘所

レガシーシステムを前提としたMDMの構築手順を紹介します。一般的にレガシーはメインフレームであったり、古いシステムを指しますが、今やマスタデータがプロセスと一体成型となっているERPなどもレガシーと考えられます。すなわち殆どの企業は、レガシー脱却問題を抱えています。

そうすると最初にやるべきことは、マスターデータをレガシープラットフォームから追い出す事です。まず、ゴールデンレコードをデータHUBに作成し、レガシーにあるマスタデータをデータHUBに取り込み、データHUBから利用先に配信できるようにします。その後にデータHUB上のデータをメンテナンスする画面エントリを作成する事でレガシーをスレブ化します。✕

要するにレガシーシステムがデータHUB化している状態を脱却します。ここがポイントです。ここまできると、レガシーシステムが自然なくなるのを待てばよいのです。その際、全てのデータ仕様をREPOSITORYに定義する事で、レコード・データのデザインやマッピング仕様は再利用を繰り返し行えます。また、企業オリジナルとなる各種マスタのレコードレイアウト、コード体系などは、セントラルREPOSITORYとして論理的に企業内で一元管理し、物理的な複数の利用箇所へ配信させます。



弊社方法論 Modus MDMの利用方法

弊社は、コンサルティング会社であり、実務を通して蓄積したノウハウを体系立てて、実用的にまとめた方法論を持っております。これから、MDMを構築しようとお考えの企業様は、その方法論を用いて、プロジェクトをコンサルティングというかたちで支援します。また、社内システム部門、システム子会社にて自力で構築される場合は、構築手法を数回のワークショップ形式でご提供したり、また方法論のみをご購入いただき、構築時のバイブルと活用していただくという方法もあります。

講演者から「ひとこと」



本セミナーでは、実際の導入経験に基づく設計の勘所や誤りなどを中心に、MDMの基本設計から構築にいたる概要をお話させていただきました。MDMは単なる管理ツールの導入ではなく、新たなアプリケーション・アーキテクチャへの転換の第一歩です。

参加者の声 ★★★★★


ご参加いただきました9割強の方より、「セミナー内容が参考になった」とお声をいただきました。一部ご紹介いたします。

- 👉 自社の課題と合わせて聞くことで腹落ちする部分がありました。考え方の整理に非常に役立ちました。（ユーザー企業のITマネジメント部）
- 👉 ビジネスアジリティに対応するためのMDM、セントラルリポジトリの考え方は、非常に参考になりました。（ユーザー企業の情報企画部）
- 👉 MDMの勘所について再認識させていただきました。今後、グローバル化対応を進めていくにあたり、本質がブレないように取り組んでいきたいと思えます。（ユーザー企業の情報システム部）
- 👉 コンセプトからお話いただき、具体的に良く分かりました。レガシーからマスターを切り出すことの重要性がよく理解できました。（メーカー企業）



アイ・ティ・イノベーションの『Modus MDM』は、MDM構築に対する共通の理解と作業の効率化を支援いたします。ぜひご相談ください。

(株)アイ・ティ・イノベーション 営業部 <http://www.it-innovation.co.jp/>
TEL : 03-5783-2811 (9:30~18:00) E-mail : info@it-innovation.co.jp

※  およびModusは、株式会社アイ・ティ・イノベーションの登録商標です。

※ 方法の如何を問わず、全部もしくは一部の無断での複写・転載を禁じます。

Copyright (C) 2016 IT innovation, Inc.